放埒な青春、そして、それぞれの道へ

―漱石が見た橋本左五郎、橋本左五郎が回想した友情―

「リテラポプリ」とは、ラテン語で「ポプラの手紙」という意味です。北海道大学（及び、その前身である札幌農学校）にゆかりのある人々の言葉を、「リテラポプリ」としてお届けします。

写真資料提供：北海道大学附属図書館

橋本左五郎（一八六六～一九五二）は、一八八五年札幌農学校に八期生として入学し、一八八九年卒業後すぐに農学校助教、ドイツ留学後には畜産学科教授となって、練乳製造法の研究などを行ないました。夏目漱石らと過ごした東京での学生時代、そして札幌農学校への入学について、漱石の文章と橋本の回想から紹介します。

一九〇九年九月、夏目漱石は、南満州鉄道株式会社（満鉄）総裁中村是公の誘いを受け、満州・朝鮮の視察に出かけた。漱石と中村は、東京大学予備門（後の第一高等学校）時代の知己であった。そして、旅先の大連では、やはり予備門時代の旧友橋本左五郎に邂逅する。橋本は当時、東北帝国大学農科大学（後の北海道帝国大学）の畜産学の教授であった。橋本もちょうどこのとき、満鉄からの依頼で満蒙の畜産状況を視察していた。漱石は「満韓ところどころ」（『漱石全集』第二巻、岩波書店、二〇〇三年三月）で橋本や学生時代について次のように評している。

▼「橋本左五郎とは、明治十七年の頃、小石川の極楽水の傍で御寺の二階を借りて一所に自炊をしてゐた事がある。其時は間代を払って、隔日に牛肉を食って、一等米を焚いて、夫で月々二円で済んだ。尤も牛肉は大きな鍋へ汁を一杯拵へて、其中に浮かして食った。十銭の牛を七人で食ふのだから、斯うしなければ食ひ様がなかったのである。飯は釜から杓って食った。高い二階へ大きな釜を揚げるのは難義であった。余は此処で橋本と一所に予備門へ這入る準備をした。橋本は余よりも英語や数学に於て先輩であった。入学試験のとき代数が六づかしくって途方に暮れたから、そっと隣席の橋本から教へて貰って、其御蔭でやっと入学した。所が教へた方の橋本は見事に落第した。入学をした余もすぐ盲腸炎に罹った。是は毎晩寺の門前へ売りに来る汁粉を、規則の如く毎晩食ったからである。汁粉屋は門前迄来た合図に、屹度団扇をばた〳〵と鳴らした。そのばた〳〵云ふ音を聞くと、どうしても汁粉を食はずにはゐられなかった。従って、余は此汁粉屋の爺の為に盲腸炎にされたと同然である。

其後左五は――当時余等は橋本を呼んで、左五〳〵と云ってゐた。実際彼は岡山の農家の生れであった。――左五は其後追試験に及第したにはしたが、するかと思ふと又落第した。さうして、何だ下らないと云って北海道へ行って農学校へ這入って仕舞った。夫から独逸へ行って、何時迄経っても帰らない。とう〳〵五年か六年か居た。つまり留学期限の倍か倍以上も向ふで暮した事になる、其費用は何うして拵へたものか頓と分らない。」

▼「え、まあ相変らずでと、橋本は案に相違した落ち付方である。昔予備門に這入って及第だとか落第だとか騒いでゐた時分には決して斯う穏かぢゃなかった。彼の鼻先が反返ってゐる如く、彼は剽軽で且苛辣であった。余は此鼻の為によく凹まされた事を記憶してゐる。

其頃は大勢で猿楽町の末富屋といふ下宿に陣取ってゐた。此同勢は前後を通じると約十人近くあったが、みんな揃ひも揃った馬鹿の腕白で、勉強を軽蔑するのが自己の天職であるかの如くに心得てゐた。下読抔は殆んど遣らずに、一学期から一学期へ辛うじて綱渡りをしてゐた。[中略]

是公だの、余だの、今の旅順の警視総長だのが落ちながら、ぶら下がってゐる間に、左五丈は決然として北海道へ落ち延びたのである。其落第の張本とも云ふべき彼が、いくら年を取ったって、斯程に慇懃にならうとは思ひも寄らぬ事で

目次

リテラポプリ ……2

放埒な青春、そして、それぞれの道へ
—漱石が見た橋本左五郎、
橋本左五郎が回想した友情—
大学文書館　井上 高聡

特集：北大は微小重力環境に挑む ……4

座談会

燃焼現象におよぼす重力の影響と
50メートル級落下塔の設置 ……10
工学研究科　藤田　修

CAMUI型ハイブリッドロケットの開発 …12
工学研究科　永田 晴紀

学生無重力実験コンテスト ……13
低温科学研究所　古川 義純
工学部１年　大村 益孝
歯学部１年　杉山 悠理

北大施設探訪 ……15

薬学部附属薬用植物園
言語文化部　眞﨑 睦子

知床学のすすめ—❻ ……16

地域と大学の協働を考える
文学研究科　立澤 史郎

もういちど北大と出会う—〈その六〉 ……18

北大応援クッキー「札幌農学校」
株式会社きのとや代表取締役　長沼 昭夫

information……19

建築設計図が語る北大の歴史—〈第6回〉……20

第二農場サイロ（緑飼貯蔵室）
工学研究科　池上 重康

左端が17歳の橋本左五郎

満韓ところどころ（十四）　漱石

白鷺

あった。」

後年、橋本が「満韓ところどころ」を踏まえて、次のように回想している。

▼「私が予備門で落第して、農学校へ来たのは、まあ主に徴兵の関係です。さあ予備門は落ちた、どこかへ入らなければといふわけだったのです。郷里が海岸であったし、実は海軍兵学校へ入らうと思ったのでした。福井先生は農学校へゆけと云はれましたが。ところが先きに試験を受けた農学校へ幸ひ合格したので、その儘こちらへ来てしまったのです。これは明治十八年の八月です。札幌へくる時には、私の袴があまりボロ〳〵だったので、夏目がこれを穿いてゆけと云って袴を呉れましたが、これも裾の方は切れてゐました。丁度剣舞をやる男が穿く様な、粗い白い縞の袴で、これを穿いて、行李を網に入れて背負って、刀を一本さして、こちらへやって来ました。」（田内静三「橋本左五郎先生の談話」、『漱石全集月報』第一一号、岩波書店、一九三六年九月）

漱石や橋本は、進取を気取って牛鍋を食らい、薄汚いなりで、驕楽に学生時代を過ごしていた。大学予備門での落第のため、橋本は詮方なく放埒な学生生活から足を洗い、漱石にもらった年季の入った袴を腰につけて札幌農学校に入学した。橋本は、後に農学校教授となり、練乳製造に関する研究などの業績をあげる。いま一方の落第の同士漱石は、盲腸炎による落第を契機に、発起して文学を志す。共に二十歳を前後する時期、若いエネルギーがそれぞれの道へと捜射を始めようとしていた。

大学文書館　井上 高聡
Inoue Takaaki